

雨月物語評釈

鷗月 洋

角川書店

日本古典評釈・全注釈叢書

雨月物語評釈

全一冊

昭和四十四年三月十日 初版発行
昭和五十三年八月十五日 五版発行

著者 鶯^う月^{づき}洋^{ひょう}

発行者 角^{かく}川^{かわ}春^{はる}樹^き

印刷者 中^{なか}内^{うち}佐^さ光^{みつ}

製本者 鈴^{すず}木^き俊^{しゅん}一^{いち}

発行所 株式^{かぶし}会社^{かいしゃ}角^{かく}川^{かわ}書^{しょ}店^{てん}

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二 ②東京三十一 九五二〇八
電話 東京 (265) 七一一一 (大代表)

落丁・乱丁本はお取替え致します

Printed in Japan

晝印刷・鈴木製本

3393-761010-0946(2)

はしがき

鵜月洋君は私が三十歳で早大国文科の講師になって二年目の昭和十四年に国文科に入学した学生であるから、教え子にはちがいないが、気分的にいえば同学の先輩と後輩といった、インチメートな交りであった。卒業論文は洒落本研究で、太平洋戦争に突入したばかりの非常時であったにもかかわらず、最優秀論文として銀時計が贈られた秀才であった。

私がしりぞいたあとの近世小説研究は、鵜月君を中心に興津要君と神保五弥君のトリオで、まずは安泰だと安心していたのに、四十年六月に四十六歳で亡くなったのは、何といっても早すぎた。私の恩師山口剛先生も、いよいよこれからという四十八歳で亡くなられた。それでというわけではないが、鵜月君が専任講師になったのを機会に話し合って、二つのテーマを五、六年がかりでまとめてもらうことになった。一つはこの『雨月物語評釈』であり、一つは大学の要請もあつた言語媒体によるマスコミの研究であつた。数々の中間報告論文を発表しながら、およそ八分通り進行したところで、中止のやむなきに至ったわけである。

鵜月君は親の代からの都会育ちで、しかも頭が切れるものだから、半可通的な一面もなくはないが、研究者としては一つのテーマを納得のいくまで時間をかけて追求するという立派な姿勢を持っていた。だから蓄積が蓄積のまま終ったことと、将来への期待とを合わせて早世が惜しまれてならないのである。

幸い『雨月物語評釈』は、本文、口語訳、語釈もほぼ完成しており、各章の解説も「白峯」「菊花の約」まで済んでおり、少し手を加えれば刊行可能な状態にあつたので、告別式の際に鵜月君の霊前で本書の出版

を約束したわけであった。それ以来、不足の部分の解説や概説や本文校訂を、鵜月君の後輩で秋成研究を続けている中村博保君に担当してもらい、その間、中野三敏君にも本文校訂に協力してもらって、遺稿はようやく陽の目を見ることになった。私は時おり相談にあずかるだけで、ほとんどなすところはなかった。よい後輩を持って、鵜月君はしあわせであったと思う。筆をおくに当って、この手のかかる仕事を快く引受けて下さった角川源義氏、ならびに編集部の皆さんに、心から御礼を申上げる次第である。

昭和四十四年一月

暉峻 康隆

目次

はしがき

凡 例

暉峻康隆

一

雨月物語序

九

卷之一

白 峯

二〇

菊花の約

一〇五

卷之二

浅茅が宿

一七

夢心の鯉魚

二七五

卷之三

仏法僧

三七

吉備津の釜

三六七

卷之四

蛇性の姪

四六五

卷之五

青頭巾

五七五

貧福論

六三三

概説

六九

参考文献一覧

七三

語句索引

七六

異体字表

七三

あとがき

七五

中村博保

凡 例

一 本書は、安永五年刊行の野村長兵衛・梅村判兵衛合刻、雨月物語五卷五冊（松浦貞俊氏所蔵）を底本とした。但し、句点及び濁点については早大本を参照した。

一 本文は、当用漢字体を使用した。底本に異体字・俗字その他が使用してある場合には、該当文字に傍点を付し、巻末の「字体表」に底本の形を示した。また原文が明らかな誤字である場合には、本文を正し、その旨、語釈に註記した。

一 底本の仮名づかい、清濁などは、通常の旧仮名づかに改め、底本の形は、すべて語釈に掲出した。半濁音についても、これに準じた。底本の変体仮名は通用字に改め、「ミ」「ハ」は「み」「は」とした。

一 底本には読点がなく、すべて句点が使用されているが、本文では文意により、句点と読点に改め、新たに加えた場合には（ ）で示した。なお、難読箇所は必要に応じ、振り仮名を付し、（ ）によって、原文の振り仮名と区別した。

一 口訳は原文に即した逐語訳を旨とし、同時になるべく原文の持味や特色をそこなわないよう留意した。補って解した箇所は原則として（ ）を施した。

一 語釈では、語義、出典、用例などを、できるだけ詳しく述べた。文法については、一応規範文法にのっとり、破格や特殊なものについてはもれなくふれるようにした。

一 解説は、ものがたりの鑑賞のほか、鑑賞に必要な知識（主題・構想・時代背景など）をまとめた。なお、

特殊な事項については、補説欄を設けて補った。

- 一 鑑賞の便を考慮し、それぞれの作品の最後に参考欄を設け、「菊花の約」「浅茅が宿」「夢応の鯉魚」「吉備津の釜」の典拠である「范巨卿雞黍死生交」「愛卿伝」「魚服記」「牡丹燈記」の原文に口語訳を付して掲載した。

一 引用書目は次の略号を用いた。

山口 剛『怪談名作集』（日本名著全集）↓『怪談名作集』	尾山信一『軌範雨月物語全解』↓『全解』
中村幸彦『上田秋成集』（日本古典文学大系）↓『大系』	今泉忠義『雨月物語精解』↓『精解』
中村幸彦『秋成』（日本古典鑑賞講座）↓『秋成』	岩田九郎『新纂雨月物語評釈』↓『新纂』
鈴木敏也『雨月物語新釈』↓『新釈』	野田寿雄『要註雨月物語』↓『要註』
鈴木敏也『新註雨月物語詳釈』↓『新註』	井上敬一『必須雨月物語』↓『必須』
佐藤仁之助『校註雨月物語』↓『校註』	岩淵悦太郎 宮本三郎『雨月物語の解釈と文法』↓『文法』
徳本正俊『校合雨月物語詳解』↓『校合』	山岸徳平 松原磐『雨月物語』（最新国文学解釈叢書）↓『国文叢書』
樋口慶千代『読本傑作集』（評釈江戸文学叢書）↓『読本』	森山重雄『雨月物語・春雨物語』↓『雨月・春雨』
漆山又四郎『現代語訳雨月物語・春雨物語』↓『現代語訳』	
重友 毅『雨月物語評釈』↓『評釈』	

- 一 底本の挿絵は、底本にもっとも近い箇所已全部収録した。

- 一 巻末に、概説・参考文献一覧・語句索引・異体字表を収めた。

雨月物語序

羅子撰水滸。而三世生啞兒。紫媛著源語。而一旦墮惡趣者。蓋為業所偈耳。然而觀其文。各々奮奇態。吟哢逼真。低昂宛轉。令讀者心氣洞越也。可見鑑事。實于千古焉。余適有鼓腹之閑話。衝(序オ)口吐出。雉雖竜戰。自以為杜撰。則摘読之者。固当不謂信也。豈可求醜脣平鼻之報哉。明和戊子晩春。雨霽月朦朧之夜。窓下編成。以畀梓氏。題曰雨月物語。云。剪枝畸人書。



羅子撰水滸(すゐこ)。而三世生啞兒(おろし)。紫媛(むらさきひめ)著源語(げんご)。而一旦墮惡趣者(おろし)。蓋為業(わざ)所偈(おほ)耳。然而觀其文(み)。各々奮奇態(おののおき)。吟哢(うた)逼真(まこと)。低昂宛轉(ひやうおんてん)。令讀者心氣洞越也(しやうきどうえつ)。可見鑑事(けんじ)。實于千古焉(じつにせんこ)。余適有鼓腹之閑話(よたまたきこ)。衝(つ)口吐出(くちで)。雉雖竜戰(けいすいりゆうせん)。自以為杜撰(おのれがた)。則摘読(てきどく)之者(もの)。固当不謂信也(もとよりたに)。豈可求醜脣平鼻之報哉(いかでか)。明和戊子晩春(めいわぼし)。雨霽月朦朧之夜(あめはつきもうろう)。窓下編成(さうか)。以畀梓氏(いへしんし)。題曰雨月物語(だい)。云。剪枝畸人書(せんしきじんしよす)。

口説

羅貫中は『水滸伝』を著わして、そのために子孫三代にわたって啞の子が生れ、紫式部は『源氏物語』を著わして、一度は地獄にまでおちたが、それは思うに彼等が架空の物語や狂言綺語を書いて世の人々を惑わせた悪業のために、その報いは低く、或いは高く、あたかもころがるようになめらかで、流暢であって、これを読む者の心持をして楽しく快くさせるものである。その当時の出来事を、遠い後の世である今日において、さながら眼前にありありとてらし出して見ることができるような思いがする。さてここに、私もちょうど泰平の世を謳歌するようなのんきなむだ話を書いたが、それは口から出まかせにしゃべりちらしたものである。雉が祭礼の庭で鳴いたり竜が野で戦ったりするような奇怪千万で、ありもしない怪奇談であるから、自ら顧みてさえ、根拠のない、疎漏の多い、つたないものだと思う。ましてこれを拾い読みする者は、もとよりこれが信ずるに足るものだと言うはずがない。だから、私の場合は、世間の人を惑わす罪もなく、子孫にみつちや鼻べちなどの片輪者が生れるという業の報いを受けるはずが、どうしてあろうか。(そのおそれはないというものである。) 明和五年三月、雨はれて月おほろにかすむ晩春の夜、座敷のあかり窓の下で編みつき、書肆に渡す。題して『雨月物語』ということにした。剪枝畸人しるす。

語釈

○羅子 羅本といい、字を貫中、号を湖海散人と称す。「子」は男子の敬称。中国杭州錢塘の人で、古来

南宋(十三世紀ごろ)の人とも、元代(十四世紀初頭)の人とも、また明代初め(十四世紀中頃)の人ともいわれ、その伝は未詳。『統録鬼簿』には明初の人と記されている。『忠義水滸伝』の著者に擬され、ほかに『三国志通俗演義』『隋唐両朝志伝』『残唐五代史演伝』『三遂平妖伝』も彼の著であるといわれているが、かなり伝説的なところが多く、その真偽は実証することができない。○撰 えらぶ、文章をつくる、の意。○水滸 『水滸

伝』、正しくは『忠義水滸伝』。中国小説中、最も名高いものの一つで、白話小説である。百八人の英雄が梁山泊に拠って官に對抗する物語で、この作者については、羅貫中とする説、施耐庵の原撰で羅貫中の編とする説、施耐庵の作とする説などがあるが、正確なことは未詳。ただ、元代にその原型ができ、明代

に今の形にまとめられた、と見るのが通説として当を得ているようである。そしていま世上に流布している『水滸伝』は、金人瑞が『水滸伝』の古本を得て評を加えた、と称するもので、七十回以後を省いたもの。ほかに十回本・百回本・百十五回本・百二十四回本など異本が多い。明代に刊本ができ、わが国にも舶載され、江戸時代には大いに愛読され、建部綾足の『本朝水滸伝』(安永二年刊)を初めとして、馬琴の『八犬伝』に至るまで、幾つかの翻案小説が作られた。また岡島冠山による百回本の訓訳本が出版された。秋成が、いつどの『水滸伝』を見たかは、はっきりわからない。中村幸彦氏は「秋成がどの本を見たか未詳ながら、晩年(文化五年)の茶神の物語に見える『兎毫の盤』の語は岡島冠山が訓訳した百回本の忠義水滸伝第四回に「兎毫蓋内香雲白」の句があって、百回本を何時か見たのかと想像されるが、よくわからない」(『解釈と鑑賞』昭和三

羅子撰此辭而三先生題之
暖若深語而一旦展惡趣者為
病業所偏年然而蒙其文者當
奇態竇突逼真俟身死時之
者心兼洞然也而免難乎言
千古焉索適立故腹之閑然
口吐出難能就我自以為然
出接謔之者固當而論後也
可求醜骨而鼻之數其明和
不曉者子齋月豫瞻之相富
編成以畀梓氏題曰兩月物
云剪枝時人書



十三(年六月号)としている。○三世 子孫三代にわたって、
の意。○啞児 啞おしの子。このことは、田汝成編の『西湖遊

志余」卷二十五の委巷叢談や『続文獻通考』卷百十七に見える俗説で、もともと仏教の因果思想に基づく説である。『西湖遊覧志余』の記事を引くと「錢塘羅貫中、本南宋時人、編撰小説數十種、而水滸伝叙宋江等事、姦盜脱騙、機械甚詳、然変詐百端、壞人心術、其子孫三代皆啞、天道好還報如此」（錢塘の羅貫中は、もと南宋の時の人なり、小説數十種を編撰す、而して水滸伝は宋江等の事を叙し、姦盜脱騙、機械甚だ詳かなり、然して変詐百端、人の心術を壞る、その子孫三代みな啞なり、天道好く報を還すこと此の如し）とある。『続文獻通考』もほぼ同文。秋成自身、後に『秋山記』で「羅氏が三代まで啞子をうみしなども云ふ」と記している。

○紫媛 紫式部。「媛」は貴女の敬称。越前国守藤原為時の娘で、藤原宣孝の妻となり、大式三位を生み、長保三年（一〇〇二）夫に死別してから、一条天皇の中宮彰子（上東門院）に仕え、『源氏物語』を著わして、長和二、三年（一〇一三、四）頃没したと思われる。行年四十一、二歳か。『源氏物語』のほかに『紫式部日記』などがある。

○源語 『源氏物語』を漢文式に略した語。 ○一旦 一度は、

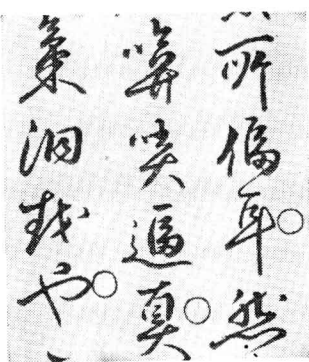
の意。次項参照。○**墮惡趣**「惡趣」は、仏教語で「善趣」に対する語。惡業を積んだ者が趣く所で、ここでは、地獄の意。

地獄・餓鬼・畜生を三惡道（三惡趣）という。秋成が「白峯」を書くにあたって参考にした西行の『撰集抄』（慶安四年版）に「惡趣にのみめくり侍らん」とある。「墮」は、おちいる、おちこむ、の意。紫部が狂言綺語を弄したために、死後地獄へ墮ちて苛責を受けた、という俗説は、仏教の因果思想に基づく説

話で、中世の説話集である『今物語』『宝物集』等に伝えられる話である。即ち、『今物語』は「或人の夢に、その正体もなきもの、かげのやうなるが見えけるを、あれは何人ぞとたづねければ、紫式部也、そらことをのみおほくあつめて人の心をまどはすゆゑに、地獄におちて苦をうくる事いとたへがたし、源氏ものかたりの名をぐして、なまあみだ仏といふ歌を巻毎に人々によませて、吾くるしみを訪ひ給へといひければ、いかやうによむべきかと尋ねけるに、桐壺にまよはんやみもはるばかりなまあみだ仏とつねにいはなむ、とぞいひける」と記している。また『宝物集』にも同じことが記されている。秋成自身その『秋山記』で「かの式部とかは、あとなしごとゆゑ／＼しく作出でたる報に、おそろしき所につなされ、永劫の苦しみをうけたるぞかし。もろこしにても、斯様のこと書ける者の報なん、いと罪深しかし。羅氏が三代まで啞子をうみしなとも云ふ、かまへて／＼信ずまじき文ぞ」と記している。「一旦」といったのは、その後、供養をしたために、やがて地獄から救ひ出されたという俗説があるからである。たとえば『湖月抄』の付録にある『源氏表白』は、安居院澄憲を代表として、紫式部を地獄から救済しようとした文章であるが、その本文に「ねがはくは狂言綺語のあやまりをひるがへして、紫式部が六趣苦患をすくひ給へ、南無当来導師弥勒慈尊かならず転法輪の縁として、是をもてあそばん人を安養淨刹にむかへ給へとなり」とあり、これによつて式部は救われたといわれる。○蓋為業所徧耳 訓み方に諸説あり。「けだし業の徧る所となるのみ」(重友『評釈』・野田『要註』等)、「けだし業に徧るところとなすのみ」(山口『怪談名作集』)、「けだし業に徧らるるのみ」(鈴木『新註』・樋

口『読本』)、「けだし業の為に徧らるるのみ」(今泉『精解』)、「けだし業を為すことの徧る所のみ」(中村『大系』)。こうした諸訓が出てくることは、言い替えれば秋成の表現が的確性を欠いていたからでもある。私は「けだし業のために徧らるる所のみ」と訓んでおきたい。「蓋」は、思うに、おそらくは、と推量して言う語。「業」は、もと所為の意で身・口・意の所作をいうが、仏教語となつて、主に悪業の意に用いられる。即ち、過去における悪い所行で、それが現世において悪い果となつて現れるもの、又、来世へ行つて悪い果となるべき現世の悪い所行をいう。ここでもその意で、羅貫中や紫式部が架空の物語を作り、狂言綺語をもつて人を惑わせた罪をさす。「徧」は、さしせまる、切迫する、の意。「白峯」にも「父の為義を殺せし報徧りて」と用いている。この文は、思うに悪業のために、その報いがこういふふうにおしせまつたというべきであらう、ぐらゐの意。○奮奇態 変つた珍しい趣向を尽し、の意。『五

雑俎』巻五、人部一に「作奇態者必得奇窮此格言也」(奇態を作す者は必ず奇窮を得ん、これ格言なり)とある。○噂嘩逼真(「噂」(又はアッロウ)を「噂」(又はアッゴ)と訓んだものが多い(佐藤『校註』・野田『要註』・今泉『精解』・樋口『読本』・鈴木『新註』等)。それに対して山口氏『怪談名作集』・重友氏『評釈』・中村氏『解釈と鑑賞』等は「噂」をとっている。そして、樋口『読本』・佐藤『校註』・鈴木『新註』等は、「噂」は「噂」の誤りかとして、『列子』の「眠中噂囁呻吟」をあげている。原本は確かに「噂」(又はアッゴ)とも、「噂」(又はアッゴ)とも、とれるようであるが、しかし「噂」(又はアッゴ)とも、とれば「噂」は、黙して言わない、の意。「噂」は、鳥がうたいさえず



4 序 部 分

ること、又その声をいう。「啼呼」で、黙したり、又、鳥のさえずったりする声の形容。ここでは、文章の調子・勢いをいうと解してよい。○低昂宛転「昂」は高と同じ。文章の調子が或いは低く或いは高く揚って、あたかもころがるようになめらかで流暢である、意。即ち、文章の抑揚・調子が自由自在になめらかなことをいう。秋成は『胆大小心録』でも「流鶯の詩につくりて、低昂宛転の時と」と用いている。○令読者心気洞越也 読者の心をして楽しく快くさせる、の意。「心気」は、心、気持、の意。「洞越」は、中村氏が次のように註している。『史記の礼書に『朱絃洞越』とあり、鄭玄の註に『越ハ瑟ノ底ノ孔也』。楽記に『朱絃疏越』とあり、同じく鄭玄の註に、疏は通に同じで、『両頭ノ孔ヲシテ相連リテ而シテ通ゼシムル也、孔小ナレバ則チ声急ニ、孔大ナレバ則チ声遅キ故也』とある。元の熊朋來の瑟賦にも亦、この語を用いる。読者の心を瑟の洞越の如くにするの意で、『琴線にふれる』と同じく、甚だ感銘せしめることの意であらう』（『解釈と鑑賞』昭和三十三年六月号）

と。従来、の註釈は出典の不明なまま、「意表に出て心をうがつ」（樋口『読本』）、「はれん」とした思いをさせる」（重友『評釈』）、「澄み徹る意」（今泉『精解』）等と解していたが、それよりは中村氏の方が当を得ている。それに従いたい。「令」は、使役の意を持つ。○可見鑑事実于千古焉「可見鑑」の訓み方について、「見鑑すべし」（重友『評釈』）、「鑑ミ見ル可シ」（今泉『精解』）等があるが、山口氏『怪談名作集』が「鑑せらるべし」と訓み、中村氏『解釈と鑑賞』が「鑑セラルベシ」と訓んで「見鑑は例えば推古記の『見殺』を『シイセラレ玉ヒス』と読む如く『らる』とよむ。」と説明しているように、ここは「見」を「らる」と訓むのがいいと思う。因みに沢田瑞穂氏は、この序文を、「事実を千古に見鑑すべし」と読むのだろうか。それにしては『見鑑』の二字が生硬だ。事実を千古に鑑見るべしと和風に読ませるつもりだろうか。それとも見を受身のラルによみ、さらに可能のラルに読みかえて、事実を千古に鑑みらるべしと読ませるのだろうか。あるいはまた、事実を千古に鑑みしを見る可しというつもりであらうか。どう読んだにしろ、その意味はやっぱり通じにくい一句である。すでに前の句「令読者心気洞越也」で文章の氣勢は一頓しているのだから、『可見……』は蛇足で、それだけが遊離してしまう。この一句すべからく刪るべし」（日本古典鑑賞講座『秋成』中の「秋成と中国小説」と言っているが、聴くべき説である。「可」は可能を表わす。「千古」は、ここでは、千年も後の今日において、の意。その当時の出来事を遠い後の世である今日において目前にteraし出して見ることができようかという思いがする、の意。建部綾足の『西山物語』（明和五年刊）の序文に「能継千古墜緒」

の語がある。○余適有鼓腹之閑話「適」は、ちょうど、ち

ようどこに、ぐらいの意。「鼓腹」は、食に飽いて腹づつみを打ち、泰平を樂しむさまという語で、『十八史略』の堯帝の

条に「有老人、含哺鼓腹、擊壤而歌曰」（老人有り、哺を含み腹を鼓し、壤を撃つて歌つて曰く）とあり、「鼓腹擊壤」の熟語もある。「閑話」は、むだ話の意で、謙辞。私はちようどこ

に泰平の世を謳歌するようなのんきなむだ話を書いた、の意。○衝口吐出（それは）口から出まかせにしゃべりちらしたものである、の意。謙辞である。○雉鳴電戰 この語句に對する

從來の解は、「雉鳴は雉の鳴くこと。『求偶鳴子悲号長嘯』意。『雉鳴求雌』（詩經）。電戰は竜の戦ふ様にはげしい戦に喩ふ。『竜戰而虎争』（班固)」（山田武司『雨月物語詳解』）とし

て、通釈に「雉が偶を求めてなくといふやうな悲しい場面もあるかと思ふと、竜が戦つて雲をよび風をおこすといふ物凄い場面もある」（同前）とする説を中心として、藤村作氏の「雉が

配偶を求めて鳴くやうな悲しい話があるかと思へば、竜が戦ふやうな恐い話もある」という解や、重友氏『評釈』の「雉が祭の庭で鳴き、竜が郊外で戦うやうな、奇怪千萬な話ができた

がった。『雉鳴き』は、書経、商書『高宗彤日、越有雉鳴。祖己曰、惟先格王正厥事』に拠り、その意は、高宗が彤の祭（正祭の翌日の祭）を行った折、雉が庭の鼎の上にとまつて

鳴いたのを見て、祖己はこれを祭の礼に欠けるところがあり、天がこれを戒めたものとし、よって王を諫めなければならぬと思わず独語したというのであり、『竜戦ふ』は、易経、上経『上

六、竜戰于野、其血玄黄。象曰、竜戰于野、其道窮也』に拠り、その意は、上六は坤が乾に迫り、陰が陽を凌がんとする形で、

たとえば二竜が郊外に戦い、ともに傷ついて血を流すにも似た、あさましくも不祥な卦であるというので、両者ともに不吉な事

の前兆となる奇怪な現象として、ここに用いてある」とする解がある。中村氏はそれを更に押し進めて、「共に怪異のありもしないやうな話の意に用いた」（『解釈と鑑賞』昭和三十三年六月号）と解している。この語句は、『雨月物語』が典拠とした

『剪燈新話』の置佑の序文起筆に「余既編輯古今怪奇之事、以為剪燈錄（中略）然而易言竜戰于野、書載雉鳴于鼎」（余既に古今怪奇の事を編輯し、以て剪燈錄となすへ中略）然り而して

易には竜野に戦ふと言ひ、書には雉鼎に鳴くことを載せ）とあるのに拠つたのであらう。そして『伽婢子』もそれによつて

「こゝをもつて、易には竜の野に戦ふといひ、書には鼎に雉の鳴くことをしるす」としている。その点からいっても、ここは、雉が鳴き竜が戦うやうな奇怪千萬な怪奇談、ぐらいの意で用いられたものである。○自以為杜撰「以為」で「おもへらく」という訓があり、ここでは「みづからもつて杜撰となす」とい

う訓み方もあるが、『剪燈新話』の置佑の序にある「既成又自以為」を、慶安元年刊『剪燈新話句解』（垂胡子集釈）は「既に成つてまたみづからおもへらく」と訓んでいるので、それを参考として、こゝも「みづからおもへらく杜撰なり」と訓んで

おきたい。「以為」は、思うに、の意。「杜撰」は、よりどころのない不確実なこと、いかげんなこと、根拠なく疎漏のこと。『野客叢話』に「杜默為詩多不合律、故言事不合格者為杜撰」（杜默詩をつくるに多く律に合はず、故に事の格に合はざるものを言ひて杜撰となす）とある。また、建部綾足の『西山

物語』の序文に、「杜撰咕噪、以為俳諧者陋矣」の語がある。